

## カロリング王権の支配空間と王領地の空間構造

尾 籠 恭 平

はじめに

これまでの一年の筆者の動向としてカロリング期の支配空間を対象として巡幸と王領地を扱ってきた。筆者はこれまでの二年間、宮松が提起した初期中世における人々の移動距離が二十キロ程であったとする説に対し、聖俗所領の所領空間を中心として考察してきた<sup>1)</sup>。その際修道院所領の空間構造と王領地の空間構造の比較を行うために王領地の空間を検討していた。しかし王領地の数と規模を確定することができないため巡幸から王領地を見る<sup>2)</sup>こととした。王領地は中世初期王権の実質的基盤であり、巡幸は王権の政治的空間を意味している。そこでカロリング朝を対象として王権の中心的支配空間を考察していきたいと考える。

## 一、カロリング王権の政治的空間

五一一年の分割は王国を四つに分けたがその内三つの分王国の首都は半徑百キロにも満たない地域に存在していた。その中で出現した王宮がコンピエーニュであった。この王宮は、メロヴィング家の王宮であった時期には、ネウストリアとアウストラシアの分王国の対立を象徴する王宮であった。しかしこの王宮はメロヴィング家の王宮であったため、ピピン家の権力の上昇とともにわずか三十

キロ程離れたケルツィーへと王宮を移した。この王宮はもともとカロリング家のウィラであったが、七三七年にティエリー四世は *palatium* としてこの場所から証書を発給している。この *palatium* という呼称は王が滞在した権力の中心を示しており、七三七年にこの場所で証書が発給されたという事実はカール・マルテルが権力を掌握していたことを示している。その後を継いだピピン三世もまたメロヴィング家の王宮に滞在することはなくケルツィーとヴェルに滞在した。しかしバルビエは聖別によるカロリング朝の誕生がピピン家とメロヴィング家、アウストラシアとネウストリアを和解させた宮廷網を構築する作業を始めたことを強調している。すなわち、ピピン家が滞在してきたケルツィー、ヴェル、ヴェルヴリエと、メロヴィング家が滞在してきたボンティオンと七五五年七月に初めてコンピエーニュに滞在したということがピピン家とメロヴィング家双方の上にカロリング朝が存在することを示している<sup>3)</sup>。

シャルルマーニュは王国の版図を飛躍的に拡大する中で、中心的滞在地をその時々の軍事遠征先に併せて移動させていった。七五一年七二二年にヴォルムス、ヘルスタルそしてデューレンが飛び抜けている。ヘルスタルとデューレンはザクセン遠征の出発点であり、ヴォルムスからはイタリアとバイエルンの方へ進軍した。七七六年シャルルマーニュは最初の大規模建築事業であるパーターボルンを造営している。「フランク王国年代記」によれば翌年にこの王宮で王国会議を開催しているが、七七八年にザクセン人によって破壊された後再建された<sup>4)</sup>。再建された王宮はザクセン遠征の拠点の一

つとなり、エレスブルクを通過してザクセンに進軍する道が存在した。またライン河の渡河地点であるリッペハムが軍招集地点となり、ここからも遠征を行ったことが確認できる。七八三―七八九年はバイエルンのタシロ三世との緊張状態の高まりからヴォルムスの滞在が飛び抜けている。バイエルンを接収したシャルルマーニュであったが、タシロ三世にかけられていた嫌疑の一つに、バイエルンに隣接するアヴァール人と連携していたという疑惑が存在していた。バイエルンに隣接したシャルルマーニュは七九〇年にアヴァール侵攻の支度を調え翌年アヴァールに遠征した。この七九一―七九三年にはアヴァールとの対立からレーゲンスブルクが中心的地位を占めている。レーゲンスブルクは大公都市でありタシロ三世が居住していた拠点であったためシャルルマーニュも引き続きこの場所に滞在していた。七九四年にフランクフルト・アン・マインで開催された王国会議はシャルルマーニュ治世下においても比類なく大規模なものであった<sup>64</sup>。またこの会議のカピトゥラリアはアーヘンで発給され、この年以降アーヘンが冬期王宮として首都的機能を果たしていったことはよく知られている<sup>65</sup>。さらにその前年から彼の息子カルロスが軍事遠征を行うようになりシャルルマーニュ自身の軍事遠征は数を減らし、この年からフランク王国は外向きから内向きへと変化していった。

カロリング朝はその後三つの王国に分割された。その結果それぞれに分王国はより狭い範囲となったが、移動の点からすればより巡幸を活発なものとした。シャルル禿頭王はいくつかの王宮を絶えず

巡幸しており、クリスマスと復活祭を同じ王宮で祝ったことは一度もなかった<sup>66</sup>。それにもかかわらず彼はコンピエーニュを格別の位置に置こうとしていた<sup>67</sup>。その最も代表的な例がアーヘンにのみ許されていた王宮付属修道院を建設したことであった。そして彼はコンピエーニュを「カロロポリス」と呼称させた。バルビエはこのことについて、ここにカロリングの名前を与えることはコンスタンティヌスが行ったことと同様のことであると見た。そしてこのことよってメロヴィング的な由来を消し去り、また彼の兄が有するアーヘンの首都的役割を消し去り、西フランクに中心を移そうとした努力であったことを示している。そしてコンピエーニュの地位はカペー朝初期までゆるぎない西フランクの中心地であったことを強調している<sup>68</sup>。

## 二、カロリング期王領地の空間構造

王領地の空間構造を把握するにあたって最も参照されるべき史料は王領地の贈与文書である<sup>69</sup>。ピピン三世は七六六年一月オルレアンで発給した文書によるとサン・ドニ修道院へ荘園一つと数マンズの寄進 (Monumenta Germaniae Historica Diplomata Karolinum (以下DK), Nr.22) を、ならびに七六八年九月サン・ドニで同修道院に対する数マンズの寄進を行っている (id., Nr.28)。カルロマンは七七一年一月サモシーでサン・ドニ修道院への二荘園を寄進するのみであった (id., Nr.53)。シャルルマーニュはサン・ドニ修道院へ二荘園を (id., Nr.92)、プリュム修道院へアンジュワ

の二荘園と若干の土地を (id.Nr.180205)、サン・ジェルマン・デ・ブレ修道院へ一荘園を (id.Nr.154)、家臣に対するナルボネの一荘園の贈与 (id.Nr.179) のみであった。以上は初期カロリング王権三代が行ってきたライン河以西の寄進についてである。他方ライン河以東の地域では異なった状況が示される。ピピンは七六〇年六月にアティニーでフルダ修道院へ一荘園を (id.Nr.13)、七六二年七月ジンツイヒでケッセルリンク修道院へ森を寄進している (id.Nr.15)。そして七六二年八月一日トリスゴロドスでプリュム修道院に対し五つの荘園を寄進している (id.Nr.16)。合計してシャルルマーニュは二荘園、五森林、九所領、三二マンスその他を修道院へと贈与している<sup>10)</sup>。

カロリング王権による寄進の政治的意図について一つの例とならうるのがロルシュ修道院である。七六四年に創建されたこの修道院は七七一年までに七二五件の私的な寄進を受けるが、急速に勢力を拡大するようになった転機は七七二年であった。この年に帝国修道院となり王権との結びつきが強まると、完全インムニテートを獲得し、複数の御料地の寄進を受けライン中流域での支配を確立し、広範な所領を獲得していく。しかし七九〇年代以降寄進の数は大きく減少し王権との結びつきが弱まっていく。帝国修道院は王権による庇護に対し軍役奉仕を行わなければならない。奥村はこの時期にザクセン戦役が始まりバイエルン遠征へと向う一連の遠征において軍資金の調達と周辺地域の安定性を確立することを意図したと主張している<sup>11)</sup>。

御料地の管理・保全を考慮に入れる場合重要になるのがルイ敬虔帝であり、地域別に贈与を以下のおこなっている<sup>12)</sup>。アキテーヌにおいて二荘園群、一二荘園、二小荘園、一城塞。ブルゴーニュで数マンスと二荘園。ネウストリアにおいて五荘園。セーヌ河北において九荘園と六小荘園を贈与している。合計二荘園群、二七荘園、八小荘園である。ルイの贈与にはそれまでと異なり六本の文書において王の家臣に対しての寄進である。そして西フランク王シャルル禿頭王ではさらに以下のようにその数を増やしている。ナルボンヌとルシヨンで五荘園群、二三荘園、一五小荘園、七マンス。ポワトゥー、リムーザン、ペリにおいて八、五荘園、四四、五マンス。ブルゴーニュとニヴェルネで一五荘園、一二四マンス。リヨネとサヴォワで二荘園。ネウストリアで一三荘園、一〇七マンス。セーヌ川北で二荘園群、三〇荘園、一一五マンスであり、合計七荘園群、九一、五荘園、一五小荘園、三九七、五マンスの御料地を贈与している。彼の贈与文書一〇三点のうち四一点が俗人あてである。もちろんルイの贈与文書の全体像ならびに御料地の全体数が不明である以上相対的ではあるにせよ、初期カロリング朝ピピン三世からシャルルマーニュまでは御料地の取り扱いに注意を払い、管理・経営に関心を持っていたが、ルイから御料地の浪費が始まりカロリング帝国が崩壊していくという一連の流れを否定することはできないように思える。それを示す例の一つが八六二年ロタール二世によってサン・テュベール修道院宛に発給された所領確認文書である (id.Nr.17)。この文書では王が家臣に与える土地の不足を解消す

るために修道院の土地の一部を簞奪し、その代償として土地財産を不可侵のものとしたとある。これに対して御料地が最も集中していたのはパリ周辺地域であり、ロタリングアの御料地は西フランクと比較して少なかったことがこの文書発給の理由であったという反論があるだろう。しかし八四三年のヴェルダン条約において調査委員達が御料地を均等に分割したと示唆されている<sup>13)</sup>。そしてシャルル禿頭王の御料地寄進政策がルイ敬虔帝から受け継がれたものであるならば、それはロタール二世についても同様のことではないだろうか。御料地寄進の速度が二つの王国において一定でなかったとしても、この文書は九世紀中頃において御料地が不足していたという事実を示していることには疑いないであろう。

### 三 おわりに

はじめアウストラシア(ピピン家)がネウストリアと抗争を繰り広げ、中心的な巡幸・支配空間を構成していたセーヌ河―オワーズ河盆地に中心地を置いていた。シャルルマーニュはライン河・モーゼル河流域へと中心地を動かし、同時にライン右岸のヘルスフェルト修道院やフルダ修道院へ贈与を行っていた。そしてこの近辺では密集した御料地の存在が確認されており、これらの修道院がこの時期以降飛躍的に拡張する要因の一つであった。しかし王宮はその時々々の遠征対象へと向いており、同時にライン河を越えた滞在は軍隊を率いている場合のみであった。ルイ敬虔帝は再度王宮をソワソン地域へと移した。シャルル禿頭王はコンピエーニュに首都的機能

を置いたがすでにカロリング王権の中心的支配空間は消失していた。そしてこの中心的支配空間に位置した王領地についてピピン三世やシャルルマーニュは意図して王領地贈与を避けていた。しかしルイ敬虔帝からこの空間での王領地贈与が行われ始めカロリング王権の中心的支配空間は崩壊した。

#### (注)

(1) 宮松浩憲「中世前期西ヨーロッパにおける交換経済―人とモノの移動を中心に―」『産業経済学研究』五十二(三)、二〇一一年、一一七―一二頁

(2) Barbier, J. Les système palatial Franc: genèse et fonctionnement dans le nord-ouest du regnum. *Bibliothèque de l'École des chartes*, 148, 1990, pp.279-285

(3) *Annales Regni Francorum* a.777

(4) この会議については日置雅子「フランクフルトの宗教会議(794)とカールの皇帝戴冠(800)」『紀要、地域研究・国際学編(愛知県立大学外国語学部)』三十三、二〇〇一年、百三―百二十六頁

(5) このカピトゥラリアについては津田拓朗「794年フランクフルト勅令で生まれた一文書に関する「史料の歴史」とシャルルマーニュ時代の統治行為における文書利用」『歴史学研究』九百五十二、二〇一六年、二五―三六頁

- (6) 下野義朗『西欧中世社会成立期の研究』創文社1992年 四六一―五〇頁
- (7) シャルル禿頭王の滞在回数としてはコンピエーニュが三十五回、ケルツィーが三十回とそれほどの差は見られない。
- (8) Barbier 注 (2) pp.295 - 296
- (9) なお以下本文で提示したそれぞれの用語は複雑な意味を持っており一概に定義することはできないが、ここでは便宜上贈与文書で言及された言葉を下野注(6)の文献にならって以下のように呼称する。フィスクスを莊園群。ウイラを莊園。ウイルリユラを小莊園。ロクスを所領。シルヴァを森。
- (10) MGH, DDK, Nr.73, 80, 81-83, 84, 90, 103-105, 107, 113, 114, 116, 117, 121, 126, 127, 139, 140, 144, 145, 149, 153, 155, 162, 165, 166, 167, 176, 182, 184, 185, 186, 198, 212°
- (11) 奥村優子「8～11世紀ライン中流地域における修道院所領経営・流通・王権―ロルシュ修道院の場合―」『西洋史学論集』四一、二〇〇三年 一八一―一九頁
- (12) Dom M. Bouquet, "Recueil des historiens des Gaules et de la France".IV, Paris, 1749, (<https://archive.org/stream/RecueilDesHistoriensDesGaules.61749/Recueil.des.historiens.des.Gaules.et.de.de#page/n7/mode/2up>) 2/6; 下野注(6) 四十四・五十頁
- (13) 下野同上三十三―三十八頁